Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

第１２０回定期演奏会

芸術文化振興基金助成事業

―うたと邦楽器しりーず―

芸術文化振興基金

１９９１年９月２４日（火）午後７時開演

津田ホール

主催／日本音楽集団

日本音楽集団 TEL 03-3378-4741

〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル 302

ごあいさつ

日本音楽集団が目指すべきもう一つのテーマに「うた」があります。日本語の発声の問題や作品の問題など、大変に大きな壁が待構えていて、これを突き破ることは容易なことではないと思っています。

今回、田中友子氏が〈藤十郎弥生狂言くどきの段〉を書きおろしてくださったことに、感謝いたします。また、単に演奏会形式ではなく、多少動きをつけたものにしてみたいという分不相応な欲望にもかかわらず、快く協力してくださった観世栄夫氏と、このようなシアターピースに「邦楽劇」と名付けてくださった上野晃氏にも感謝いたします。

今宵は“新しい日本のうた”を目指して果敢に挑戦してくださる谷珠美、浅香五十鈴、曽我淑人氏らの熱演を、お客様とともに大いに楽しみたいと思います。

田村　拓男

プログラム

Ⅰ．二つの田園詩

作曲　長沢　勝俊

〔尺　八〕　米澤　　浩
〔箏〕　熊沢栄利子、桜井　智永
〔十七絃〕　山田　明美、外山　　香

Ⅱ．笛吹き女

作詩　深尾須磨子・作曲　中島　靖子

〔う　た〕　谷　　珠美（客演）
〔笛〕　宮田耕八朗
〔箏〕　白根きぬ子
〔十七絃〕　宮本　幸子（客演）
〔打楽器〕　西川　啓光

— 休　憩 —

Ⅲ．邦楽劇〈藤十郎弥生狂言くどきの段〉（委嘱・初演）

原作　菊池　　寛
脚本・作曲　田中　友子
演出　観世　栄夫

〔う　た〕
藤十郎　曽我　淑人（客演）
お　梶　浅香五十鈴（客演）

〔尺　八〕　水川　寿也
〔三味線Ⅰ〕太田　幸子
〔三味線Ⅱ〕原田富士江
〔二十絃箏〕宮越　圭子
〔打楽器〕　尾崎　太一
〔指　揮〕　田村　拓男

（三味線の野口美恵子が病気のため、原田富士江に代わりました。ご了承下さい。）

★ 二つの田園詩

「二つの田園詩」のこと

「人形風土記」「大津絵幻想」「崩春」「まゆだまのうた」などに貫かれる長沢勝俊氏の自然に対する人間の営みや自然そのものに対する愛着や憧憬は、演奏家の心をも強く打つもので、この作品にも貫かれている。静と動の二楽章によって構成されるこの曲は、ひろくアマチュアからプロまで演奏・愛好されており非常にポピュラーな印象を与えるが、長沢氏にとっては唯一の箏・十七絃・尺八の三重奏であり、日本音楽集団の１２０回の定期演奏会を通して初めての演奏である。今回の企画は『うた』をメインにうたっている定期ではあるが、アンサンブルを楽しんで戴ければ幸いである。この曲は井上昌山氏の委嘱で1973年に作曲された。　（米澤　浩）

★ 笛吹き女

「笛吹き女」のこと

この度、日本音楽集団の演奏会で「笛吹き女」を取り上げて下さるとのことで、大変嬉しく存じます。日本音楽集団のみなさまが、一つの考えに固まらないで、いろいろな考え方をとり入れた公演をしていらっしゃることは、とても素晴らしいことだと思います。

私が「笛吹き女」の詩に出会ったのは昭和24～25年頃、親しい友人であった片岡みどりさんが、書き写してくれたものを手渡されたのが初めてでした。いい詩だなァ、好きだなァ、すごいナ、と思いつつ７年間あたためた後に、素直に音にすることが出来ました。友人と一緒に、深尾須磨子先生の御宅に伺った時、“私の笛はこれよ”と、パンツルックの詩人深尾須磨子が銀のフルートをいとも流麗に吹いた姿が思い出されます。

（中島　靖子）

笛吹き女について

深尾須磨子の詩集「牝鶏の視野」の中の「笛吹き女」をアルトの為の歌曲に作曲したもので、篠笛、尺八、箏、十七絃それに、打楽器として小鼓が加わり伴奏をしている。

歌詞はいわゆる候調で十二章にわかれているが、その内容を忠実に再現しつつ、調性やリズム、テンポなどが次々に移り変りながら、終章まで演奏される。1956年作曲。

〈歌　詞〉

笛を吹き候　　ひゅひゅらひゅひゅらと
笛吹きて悔ゆるのに候　　吹くは孤独の笛に候
笛吹きて祈るのに候　　あはれいつよりか
笛吹きて生くるのに候　　ぴえろは涙を忘れけむ

尺ばかりなる篠竹の　　寂しとや
あな手作りのおぼつかな　　哀しとや
唯かりそめのすさびにも　　むなしとや
笛吹く子にて候ひしが　　されどなほ笛吹くことの候に

笛を吹き候　　哭きたまへ
笛はしろがね　　只哭きたまへ
早瀬のままに冴ゆる初鮎　　哭きつかれては笛吹きたまへ
音はむらさきの秘めごとに候　　望みは一管の笛にのみやどり候

笛を吹き候　　人のおもひを吹きすましては
笛は真　　いよよおどけし世のふりの
笛は神　　名もうつそみもなべてものかは
まづをろがまではもの申されぬ　　笛のはしため笛を吹き候

笛吹けば　　笛吹かばや
小犬立止り候ひぬ　　春にて候ものを
雀をどり候ひぬ　　笛吹きて雲の懸橋を渡らばや
壁耳を傾け候ひぬ　　笛吹きて天の戸をおどろかさばや

笛を吹き候ひしが　　りらのかをりを音にこめて
もの売り人の声の聞えしかば　　今宵まゐるは異国ぶりの牧歌調に候
はたとばかりに吹き止め候　　酔ひたまへ
やがてまた吹き出づるのに候が　　異国ぶりの月もをかしきに

★ 邦楽劇〈藤十郎弥生狂言くどきの段〉

奥行きの深い舞台に

観世　栄夫

「藤十郎の恋」という菊池寛の小説は、早くから脚色上演され、多くの名舞台を生んでいる。初代の鴈治郎がこの作品を持って上京し、東京の歌舞伎座で大変な評判を得、二ヶ月続いて上演したほどの人気作品となった。以後、新派を始め、多くの名優たちが、この作品を上演している。

菊池作品を貫いて流れているものに、封建社会の中で生きぬいて行く人々の、人間的な苦しみといったものがある。これらは現在にいたるまで人をひきつける力となっている。

この作品を〈邦楽劇〉として田中友子さんが仕上げられた。和楽器との歌芝居、美しい日本語で心に響く歌唱、そして日本風な感性によって奥行きの深い舞台にしたいと稽古を重ねています。

坂田藤十郎の錦絵（早稲田大学演劇博物館　所蔵）

藤十郎について

元録期に京阪で一世を風靡した歌舞伎役者坂田藤十郎（1647～1709）は、江戸から来て藤十郎と競い合った初世、中村七三郎とともに、写実劇を代表する存在であったといわれますが、菊池寛原作の「藤十郎の恋」は、この中村座に負けまいとする坂田藤十郎の芸熱心を主題とした戯曲として、広く知られております。近松門左衛門の「おさん茂平」の狂言台本を演じるにあたって、役者藤十郎はくどきの効果をたしかめるため、貞淑のほまれ高い、茶屋宗清のお内儀に偽りの恋を仕かけ、なびくと見るやするりと身をかわし、なぶりものにされたお梶は苦しみに耐えかねて自害するという筋書きであります。

音楽集団の公演に、邦楽器のアンサンブルと共演する形で、テノールの藤十郎とメゾソプラノのお梶というイメージが出来上がったとき、私には演奏会形式しか思いつきませんでした。それが思いがけず、観世栄夫先生の演出を頂くこととなり、所作を伴い、そして何よりも原作を脚色する能力などない私に、温かい御指示を下さってなんとか形あるものにまとめてさせて下さったことは、不思議な僥倖としか申せません。そして集団の演奏家の方たちが、邦楽器に未熟な譜面や書式を助けて下さったことも、曽我さんと浅香さんの自発的な表現上の工夫も、指揮者の田村先生があらゆる面で鼓舞し、支えて下さったことも、私の身には過ぎたことばかりでした。それに、今夜、長沢先生や中島先生の秀れた作品の後にまで、この演目を励ますために御席にとどまって下さった方々に、作品の上演経験も少ない私としましては、心から感謝申上げるほか成すすべもありません。もしかしてこれは、「藤十郎の恋」が持つ、カリスマ的引力による実現といえるのではないでしょうか～。

（田中　友子）

あらすじ

“かくなり果つるからは、たとい火水の苦しみも……死出三途の道なりとも、御身とならばいとわばこそ……”

近松門左衛門の新作狂言の台本を懐に、茶屋宗清の宴の席を抜け出した役者藤十郎は、ひとり奥座敷で演技の工夫に余念がない。仲々に工夫がつかず、台本を投げ捨て、低い嘆息をもらす。ふと、廊下に人の気配。現れたのは、茶屋宗清のお内儀、お梶。

「あれ！藤様でござりましたか。いかい粗相をいたしました。ご免くださりませ。」

何気ないやりとりの途中、藤十郎はふと、お梶の顔を見る。くっきりと白い細面に、眉の跡が美しい。しばしうっとりとしていた藤十郎の瞳が、だんだん険しくなってくる。（よし、ひとつこのお内儀を恋の相手に、くどきの稽古を試みようではないか！）……。

いよいよ開演の時は近づき、《都十二月》を奏でる三絃の音に、新春の陽気さの漂う観客席では、なぶりものにされたお梶の噂話に花が咲き、貞女の誇りを傷つけられたお梶は、深く心に決する所あって楽屋に姿を現わす。折しも、《若衆万歳》に湧き立つ舞台のさんざめきが漏れくる楽屋口で、お梶はおこそ頭布に身を包み、扮装した茂平姿の藤十郎と鉢合せをする。この直後のお梶の死がもたらす衝撃は、舞台の出を待つ名優、坂田藤十郎の胸の内に果して———。

〔ゲスト・プロフィール〕

谷　珠美

東京芸術大学卒業、同大専攻課及び大学院修了、在学中安宅賞受賞、1963～64年米国ワシントン大学で客員講師、1979年「谷珠美邦楽研究グループ」を結成し声の可能性を求めて毎年新しい現代曲を発表、1986年リサイタル「山田検校そして現代」に対して文化庁芸術祭賞受賞。

宮本　幸子

小田桐雅香、中島靖子氏に師事、1960年全国邦楽コンクール入賞、1964年アラブ連合主催「国際民族芸術祭」に参加、同年日本音楽集団の結成に参加、1985年退団。

1971年より十七絃リサイタルを３回開催、1986年「中島靖子作品による箏・十七絃リサイタル」を開催。現在正派邦楽会所属。

浅香　五十鈴

国立音楽大学声楽科卒業、1973～84年ミラノへ留学、サラ・スフォルニ・コルティ、マンフレーディ・アルジェント氏に師事。オペラ市（ミラノ）主催「蝶々夫人」「愛の妙薬」等に出演。帰国後各地でリサイタル、コンサートに出演。日伊音楽協会会員。

曽我　淑人

東京芸術大学声楽科卒業、同大学大学院修了。畑中良輔氏に師事、1980年ウィーン国立音楽大学留学、W・シュタインブルック、O・ペッヒャ氏に師事。東京室内歌劇場を中心に二期会、労音、NHKテレビオペラ等に出演、また、モーツアルトやシューベルトのオラトリオのソリストほか、ドイツ歌曲の演奏、最近では日本歌曲を歌う機会が多い。

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL（792）8481

ラガッタ

La gatta

おしゃれな猫たち

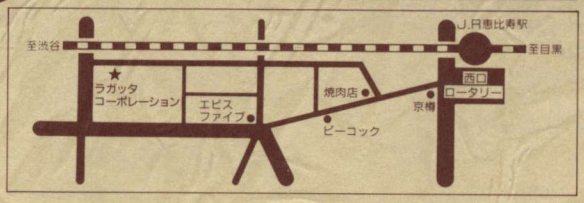
使うほどやさしさが伝わってくる本物のギフト

糸からこだわって織りあげた品々。日本発世界へ。

あなただけの一流品

生活提案型商品
アイテム

クッション
パジャマ
ピロケース
シーツ&ボックスシーツ
掛けカバー
ブランケット
エプロン
ナプキン
ランチョンマット
テーブルクロス&センター
かさ
バッグ
ブローチ、他



お問い合わせは…
株式会社ラガッタ
〒150 東京都渋谷区恵比寿西
2-3-3　武田ビル1F
03-3462-7891㈹